

# 安楽寺だより

第 7 号

2 面  
3 面  
4 面

安楽寺から六十二名の皆様が参拝  
若院、被災地のボランティアに参加  
仏教豆知識（お仏供）

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良  
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇  
電話 〇五二（八四一）二六〇六

## 宗祖親鸞聖人 御遠忌法要を厳修 750回



本年、四月十九日より五月二十八日まで京都東本願寺・真宗本廟において、宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要が勤まりました。法要には全国各地からご門徒・ご信徒の数十万人の皆様がご参拝されました。

このたびの親鸞聖人の五十年に一度のご法要は三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震と大津波により命を亡くされた皆様に哀悼の意を表するとともに、苦難の生活を強いられておられる被災地の多くの皆様への支援の願いを込めて勤められました。

聖人があきらかにして下さった本願念仏の「み教え」は、現代日本が歩んできた「経済成長」の影で孤独・孤立を深める人間社会の苦悩に光をあてるとともに、私たち一人ひとりが現代社会の闇をどのようになさるのかを問うておられます。

限りなき慈悲とさわりなき智慧の『なむあみだぶつ』は空しく過ごしている私たちのあり方を深く慙愧せしめ、生きる意欲と喜びを与えてくださいます。『なむあみだぶつ』によってたまわる私とあなたの関係において、相共に「人間回復の一道」を歩んでまいりたいことを願っております。

宗祖聖人御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」

無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる



1号車の皆さん



2号車の皆さん

五月二十日、バス二台に分乗して、安楽寺ご門徒六十三名の皆様と宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要に参拝致しました。当日は、爽やかな五月晴れで、ご参加された皆様の参拝への期待と願いが伝わってくるような雰囲気でした。

まず先に、平安神宮近くの京都市美術館で開催中の、親鸞展を鑑賞しました。館内には、全国の由緒ある寺などが所蔵する銅像や書物・名号軸などが展示されており、食い入るように鑑賞される方もありました。

## 6,000人の参拝者と一緒に『正信偈』をお勤め

正午過ぎ、東本願寺に到着しました。境内は午前の法要に参拝された皆様で一杯でした。御影堂前の白洲において、参拝記念写真を撮ったあと、同朋会館で昼食を頂きました。同朋会館は全国の本願奉仕団の皆様が研修を受ける場所、十年前前に二十二組の推進員養成講座でお見えになった方もあり、懐かしそうにしておられました。

午後二時からの御遠忌法要は真宗宗歌を斉唱したあと、大谷暢顯ご門首の「このたびの震災で、あらためて生死無常の世界を生きている身の事実を知らしめられ」との表白を頂き、大谷大学学生の岸上仁さんから、「真宗を学んで、初めて生きること、真剣に向き合ってたこなかった自分に気づいた」との感話をお聞きしました。

その後、参拝された六千名の皆様と一緒に、『正信偈・五濁念仏和讃』をお勤めしました。私は、親鸞聖人の御真影の前で念仏を称えながら、仏さまの願いに答えていない自分に頷くことから、一歩を始めねばならないと深く感じました。

## 被災地を廻って僕自身が

## 実際に感じたこと

吉田 昌史

五月十五日から四日間、岩手県にボランティアに行ってきました。震災当初から「何かできることはないだろうか?」「何かしたい!」という気持ちだけで、なかなか行動に移せなかった私でしたが、ある時知人のお寺さんから「東北にボランティアに行くけど一緒にどう?」と、誘っていただいたので行くことができました。震災から二ヶ月以上過ぎていましたが、まだまだ町は瓦礫の山が多く「本当にここに人が住んでいたのか?」と思えるような光景が一面に広がっていました。



Kさん宅での手伝い

ボランティアとしては、津波被害に遭われた地元寺院のご門徒さんのお宅で片付けを手伝いさせていただき、僧侶としてはご遺体の安置所をお参りさせていただきました。

片付けを手伝いさせていただいたところでは、家屋自体は辛うじて残っていましたが、一階部分は津波がきて色々なものが散乱していました。そこに震災以前住まっていたKさんの口から「今はお念仏に感謝、自然にも感謝、津波にも感謝。津波がきたことよって、今までいかに驕って生きてきたかを思い知らされました」と言われたことが、とても印象に残りました。あれだけ被害をもたらした津波に『感謝』という言葉をかけられること。まさしくお念仏の教えそのものと私は感じました。普段感謝することには「ありがとう」と言いますが、危害を被ったことには決して「ありがとう」とは言わないはずですが、でもお念仏の教えというのは、善悪関係なく自然の生業として受け入れる心ではないでしょうか?

## ご協力ありがとうございました

東北地方  
太平洋沖

## 災害救援金

五七六、八〇〇円

今年五月の春季永代経法要に、お願いを致しました『東北地方太平洋沖災害救援金』は六月末日現在で、五七六、八〇〇円を、お預かり致しました。本山を通して、被災者の皆様に届けさせていただきます。

大震災より三ヶ月余りが経過しても、今なお被災地の皆様は苦しみの生活が続いております。「少しでも将来に希望が持てますように」と願って引き続き支援をしてみたいとおもいます。

今回ボランティアに行かせていただいた、少しでも被災地のお役に立てばと思っていたのですが、反対に色々なことを教わって帰ってきてしまいました。まだまだ被災地では人の力を必要としているところがたくさんあります。また機会があったら、もう一度ボランティアとして現地と関わっていききたいと思っています。

# 仏教豆知識

第七回



## お仏飯

わたしたちの感覚（五感）のなかで「舌」に  
応ずるものは、「お仏飯」であります。

日常はお仏飯（お仏供）を朝のお勤めのあ  
とに供え、昼前にお下げ（お控え）します。

お仏飯は、毎朝炊き立てのご飯を、盛槽を使  
って円柱型にして盛り付けます。お仏飯は浄  
土のお飾りとして供えます。お仏飯は亡き人  
の食事ではありません。本来、姿形には見え  
ないお浄土を、わたしたちの感覚（五感）に  
応ずるように表現したもののなのです。

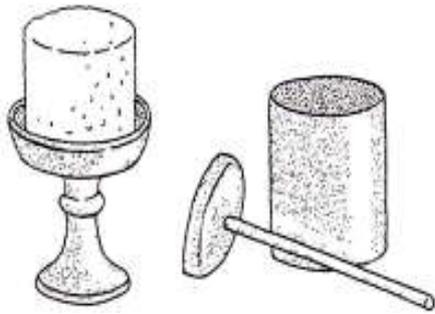
お仏壇（お内仏）は、浄土を表すものであ  
りますから、娑婆（この世）の延長でもなく、  
欲望を満たしてくれるところでもありませ  
ん。従って、仏様（ご本尊）や亡き人のお腹  
を減らしているのではないかと、心配するこ  
ともないのです。

だからお仏壇の中にお膳やお酒・お茶など  
は供えません。もし、供筒にお供えするの  
であれば、お餅や白いお饅頭などがよろしい

でしょう。それ以外のいただきものや初ものな  
どは、お供え物としてお仏壇のまえに、お盆  
か机に載せてお供えすれば、お莊嚴を乱すこ  
ともなく、こころを表すことができます。

お供え物は、お勤めなどの仏事が終わつた  
ら、お下げして「ほとけさまからのいただき  
物として食する」のが、本来のお供え物の意  
味です。お墓の供物も同様で、供えたまま無  
駄にゴミにしては、仏様のおこころに合うも  
のではありませんので、充分心得て下さい。

毎日お参りするお仏壇（お内仏）は、お浄  
土の莊嚴（お飾り）を表しています。仏に帰  
依し、先祖を偲ぶ報恩感謝の心をささげる場  
所でありますから、いつでもきれいにし、敬  
う心をもってお給仕にあたってください。



今年も夏が近づいてきました。夏休  
み・盆踊り・夏祭り・郷里の墓参り、

等々考えるだけでも何かしら心躍る  
のは、日常生活から離れることへの憧  
れや期待が有るからかもしれません。

しかし、今年の夏はちよつと違う風  
が吹いています。「節電」「自粛」は、  
私たちの生活の見直しを促していま  
す。人類の進歩に必要なだとされた原子  
力発電が安全でないことにみんなが  
気づいたからでしょう。

震災は私たちに「あなたは、このま  
までいいのか？」と、問われていると  
思わずにはいられません。